

## 古英語英雄叙事詩における *hand* 考察

矢 田 裕 士

一序一本稿ではゲルマン武人の理想を描いた古英語英雄叙事詩 *Beowulf* 及び *The Battle of Maldon* の二篇を取りあげ、両詩の中で使われている同義語 *hand*, *mund*, *folm* の3語に焦点をあて、それぞれの意味領域の異同を文脈を頼りに論じてみたい。

〔I〕 周知の如く両詩とも古英詩特有の *style* と *versification* を示す作者不詳の *alliterative poetry* で、制作年代もおおよその年代しか確定していない。*Beowulf* は紀元725年頃の作とされ、湖沼に棲む怪物グレンデルとその母なる妖女及び火龍と英雄ベオウルフとの壮絶な死闘が人間の運命の悲哀を混えて、デンマーク王朝を舞台に繰り広げられるゲルマン民族の一大英雄叙事詩である。また *The Battle of Maldon* は *Anglo-Saxon Chronicle MS. A* の933の項に記述されているように紀元991年に起った史実 Maldon の戦いの場面を、後にその戦いを直接体験した者か、戦いを傍観した者、あるいは間接的に戦いの模様を聞き及んだ者が、敗れはしたが *Anglo-Saxon* 族の英雄 *Byrhtnoth* とその勇猛にして忠義心ある部下たちが、いかに祖国と主君のために侵略者 *Vikings* を相手に雄々しく死を賭して闘ったかを極めて写實的に描いた作品であるとされている。

両詩とも死闘をテーマの下敷としてしているので、当然のことながら槍、刀、剣、楯など武器を表わす語が頻出する。それら古来からの武器を使用する場面の中であって、素手の人間が持つ最大の武器「手」が随所にクローズ・アップされているように思われる。もちろん物を掴んだり、握ったりする本来の「手」の肉体的機能に関する記述も数多くあるが、両詩の重要

な場面で使用されている「手」には肉体的機能としての「手」の他、なに  
かシンボル化された「手」や比喩的な「手」の意義が感じられる。

## 〔Ⅱ〕 古英語における「手」の同義語

古英語における「手」の同義語としては *hand*, *mund*, *folm* の3語がある。両詩の現代英語訳書を各種参照してみると、この同義語3語に対する訳語は、それぞれの語義を区別してつけられていないことがわかる。大半の翻訳書の訳語としては、いずれの古英語に対しても *hand* があてられており、時折 *palm*, *fist*, *arm*, *limb* などの訳語が与えられているが一貫性は見られない。古英語にも *palm*, *fist*, *arm*, *limb* などの現代英語に対応する語彙としてはそれぞれ *brad hand*, *fyst*, *lim* が存在した。しかし古英語の *hand*, *mund*, *folm* に対応する現代英語は判然としない。現代英語では *hand*, *palm*, *arm*, *limb* などの語は比喩的意味においては一部意味領域が重なる部分もあるが、身体の部位名称としては明確に区分されている。果して古英語では *hand*, *mund*, *folm* という「手」の同義語が身体部位としてそれぞれ区別して使用されているのか、また比喩的な意味としてはどのようなものがあるかを両詩から具体例を挙げながら考察してみたい。頭韻と同義語使用との問題については本稿では詳述できなかったが「結論」で私見を述べることにする。

## 〔Ⅲ〕 *hand* 考察

先に戦いの場面では「手」の存在が浮彫されるが如く描かれているところが多いと述べたが、その例を示す。

- ① *het þa hyssa hwæne hors forlætan,*  
*feor afysan and forð gangan,*  
*hicgan to handum and t[*o*] hige godum.*

[*Maldon* 2-4]

(Then he commanded each of the warriors to leave his horse, to

---

drive it away and to go forth, to think of his hands and of good courage.)<sup>(1)</sup>

*Maldon* の冒頭部分の詩行である。 Vikings の侵略を迎え打つ Anglo-Saxon 軍の雄将 Byrhtnoth が部下に馬から降りて、<sup>(2)</sup> 各々の「手」と「勇気」で戦いに臨むよう激を飛ばしている場面である。‘*hicgan to handum*’ の部分に使われている *hand* は広義には武器を携えて握る「手」と解釈されるが、その武器は明示されていない。この場合の *hand* とは武器を巧みに使いこなす人の「手」、すなわち *skills* としての「手」のことである。そしてこの *hand* は現代英語の身体部位（指先から手首までの部分）を表わす「手」ではなく指先から肩に至るまでの「手」とそこから生ずる腕力、筋力そして体力、知力、勇気のすべてを含む一人の雄々しき武士の全体像がこの *hand* には集約されていると考えるべきであろう。

- ② Frod wæs se fyrdrinc, he let his francan wadan  
purh ðæs hysses hals; *hand* wisode  
pæt he on þam færseaðan feorh geræhte.

[*Maldon* 140-142]

(The warrior was skillful: he let his lance go through the man's neck. His *hand* guided it, so that he reached the life of his sudden enemy.)

デー人の若武者が放った槍に傷ついた将 Byrhtnoth は名立たる豪の者である。彼は傷つきながらもこの若武者めがけて槍を投げつける。その槍はこの敵の首を射抜くほど致命的なものであった。ここでは *handwisode* というくんだり、敵を死に至らしむ直接の原因となった槍の記述部分よりもはるかに重々しい響きを伴ってくる。強き武士のシンボルとしての「手」と解せる。

- ③ Nu sceall billes ecg,



---

ac hine es modega      mæg Hygelaces  
hæfde be *honda*,      wæs gehwæper oðrum  
lifigende lað,      [*Beowulf* 809-815a]

(Then he who before had brought trouble of heart to mankind, committed many crimes—he was at war with God—found that his body would do him no good for the great-hearted kinsman of Hygelac had him by the *hand*.) (D)

グレンデルを捕えたベオウルフの「手」は怪物の筋肉をひきちぎり骨を砕く程強力なものであった。‘him on eaxle wearð syndolh sweotol, seonowe onsprungon, burston banlocan’ [*Beowulf* 816b-818a] (a huge wound in his shoulder was exposed, his sinews sprang apart, his bone-locks broke) (D).

⑥                                      Ðæt wæs tacen sweotol  
syþðan hildedeor      *hond* alegde,  
*earn ond eaxle*      — þær wæs eal geador  
*Grendeles grape*—      under geapne hr(of).

[*Beowulf* 833b-836]

(That was clearly proved when the battle-brave man set the *hand* up under the curved roof—the *arm and the shoulder* ; there all together was *Grendel's grasp*.) (D)

古英語の *hand* が人間以外の動物（グレンデルは湖沼に棲む半人半獣の怪物。擬人化されている場面も多い<sup>(4)</sup>）にも用いられている例である。後述するようにグレンデル及びその母親の「手」を表わす場合には *folm* も用いられている。<sup>(5)</sup>

夜な夜なフロスガール王の館へオロートに出没し、王の家来たちを殺戮していたグレンデルを *hand* で退治したベオウルフがその証として館の屋根上に据え置いたものが怪物の「首」<sup>(6)</sup> ではなく *hand* であることはこの詩においては象徴的である。また ‘hond…earn ond eaxle…Grendeles

'grape' の表現形式にも注目したい。先ずグレンデルの命を奪ったシンボルとしての *hond* が示され、次に具体的に 'earm ond eaxle' と言い換え更に 'Grendeles grape' と言い換えている。同一内容の語句を重複させたり、次々と異なった語句で換言していくこの修辞技法は古英詩特有の常套的表現形式である variation (変叙法)<sup>(7)</sup> がここでも用いられていると考えられる。従ってこの場合の *hond* の意義にはグレンデルの arm and shoulder を含めた全体の「手」のイメージが浮んでくる。

*Beowulf* 全篇を通してグレンデルや妖女の全容は明らかにされていない。詩人がもし怪物の正体を具体的に描写したとすると、その恐しさは半減したことであろう。得体の知れないもの、未知のものこそ人間の恐怖心をそそるものなのである。この観点から *hond* が非常に効果的に怪物のシンボルとして描かれていると言えよう。<sup>(8)</sup>

- ⑦ Þær unc hwile wæs *hand* gemæne;  
 holm heolfre weoll, ond ic heafde becearf  
 in ðam [guð]sele Grendeles modor  
 eacnum ecgum; [*Beowulf* 2137-2140a]

(Down there, for long, we fought *hand to hand*; the mere seethed in blood, and I cut off the head of Grendel's mother in that deep [war]hall with her own great edge.) (C)

ベオウルフは先にグレンデルと闘った時 'ic hine sweorde swebban nelle' [*Beowulf* 679] (I will not kill him by sword) と豪語したようにまたもや湖底に棲む女怪を求めて素手の闘いを演ずる。剣を使って女怪のとどめを刺すが、この闘いにおいて主なる武器は両者の巨大な「手」である。ここでは「手」をどのように使って闘ったかは不明であるが後述するように握力・筋力を特に強調する時には *mund* を使うことが多い。<sup>(9)</sup>

- ⑧ Ne hedde he þæs heafolan, ac sio *hand* gebarn  
 modiges mannes, þær he his mæges healp,



うな用法は *mund* にも *folm* にもみあたらない。

⑩

*hond gemunde*

fæhðo genoge, feorhsweng ne ofteah.

[*Beowulf* 2488b-2489]

(his *hand* remembered feuds enough, did not withstand the lifeblow)

(D)

ベオウルフが自らの過去を語る場面である。‘*hond gemunde fæhðo genoge*’とは「手が多くのうらみを思い出す」の意であるから、ここで使われている *hand* は人の「心」であり、「頭」であり、「人」そのものの比喩的使用と考えてよい。*hand* に「心」「記憶力」の含意を与える用例は *mund* にも *folm* にもない。

⑪

biter wæs se beaduræs; beornas feollon  
on gehwæðere *hand*, hyssas lagon.

[*Maldon* 111-112]

(bitter was the rush of battle, warriors fell on each hand; young men lay low)

Anglo-Saxon 軍が Vikings を相手に戦闘を始めた場面である。訳文の on either hand は on either side の意である。‘on gehwæðere *hond*’の句は Bosworth-Toller の An Anglo-Saxon Dictionary の *hand* の項にも次の用例が挙げられていることから慣用句として用いられていたと考えられる。‘*ƿæ wæs micel wæl geslægen on gehwæðre hond*’ (there was great slaughter made on either side) Chr. 871; Erl. 74, 12; Byrht. Th. 135. 2;

⑫

gif he gesecean dear

wig ofer wæpen, ond sipðan witig God

on swa hwæpere *hond* halig Dryhten



mærðo deme, swa him gemet pince.

[*Beowulf* 684b-687]

(if he dare seek war without weapon—and then may wise God,  
Holy Lord, assign glory on whichever *hand* seems good to Him) (D)

ベオウルフがグレンデルの襲撃を待ちながら、これから繰りひろげられる死闘の結果を神に任ねて独白する場面である。ここでも上記の例と同様いずれの side (側, 手中に神の御加護が下るか) の意で用いられている。

⑬ Syððan Beowulfe brade rice

on *hand* gehwearf; [*Beowulf* 2207-2208a]

(then the broad kingdom came into Beowulf's hand.) (D)

功成り名を遂げたベオウルフの「手中」に国が与えられるくだりである。この *hand* は支配, 管理, 権力などの意で用いられている例である。

⑭ Næfre ic ænegum men ær alyfde,

sipðan ic *hond* ond *rond* hebban mihte,

ðrypærn Dena buton þe nu ða.

[*Beowulf* 655-657]

(Never before, since I could raise *hand* and shield, have I entrusted  
to any man the great hall of the Danes, except to you.) (D)

①～⑬で取りあげた *hand* の用法とはいささか異なるが, 'hond ond rond hebban mihte' の部分に言外の意味が表わされていて興味深い。'hand ond rond' は文法的には *hand* が主で *rond* が従の関係にあるとも解せるので, 訳文としては I could lift shield arm (又は a hand with a shield) も可能ではあるが, いずれにしても文脈上 *hand* を挙げるのが権力 (power, control) の象徴としての意を表わしていることになろう。*hand* に power, control, authority などの概念を持たせる比喩的用法は「手権」(夫が妻に, 親が子に対して持つような権力) の意のラテン語 *manus* 「手」に共通している。

〔Ⅳ〕 *mund* 考察

*mund* は Klaeber の glossary では詩語の指定を受け語義としては *hand* のみが与えられている。また Bosworth-Toller の An Anglo-Saxon Dictionary の *mund* の項には I. a hand II a hand (as a measure) III. (a) protection (cf. to be in a person's hands, and v. hand) (b) in a technical sense, guardianship (c) in a personal sense, a protector, guardian (cf. mund-bora, mundbyrdness II) Add-(d) as representing control, grasp & C. IV. as a technical term in the laws (a) protection, guardianship extended by the king to the subject, the king's peace by the head of a family to the members (b) the fine paid for violation of *mund* などの語義が与えられている。

(表1)〔p. 184〕に示したように *The Battle of Maldon* には *mund* の用例は一つもない。*Beowulf* には5例あるが以下に列挙するように、いずれも先に述べた *hand* の語義の幅の広さに比較すると非常に狭い意味領域で使われていることが判明する。*Beowulf* の現代語訳の多くは単に *mund* の訳語として *hand* を与えているものが多いが、用例のいずれもが手の握力、腕力あるいは握力を連想させる文脈で使用されていることに気づく。

- ⑮ Gewat him þa to waroðe      wicge ridan  
 þegn Hroðgares,      prymmum cwehte  
 mægnwudu *mundun*,      mepelwordum frægn:  
 [ *Beowulf* 234-236 ]

(He rode his horse straight down to the shore, retainer of Hrotgar, brandished his spear, shook the strong wood, *mighty in his hand* spoke out stiffly.) (C)

ベオウルフが船に乗って部下と共にデネの国の海岸に到着したところ、フロスガール王の海岸警備兵が馬上から大槍を力いっぱい両手で振りかざして尋問する場面である。ここでは前述した *hand* とは違って手の力の強さ、すなわち握力が強調されているように思われる。*hand* が手の全体を示

すのに対し *mand* には手の機能の一部が暗示されるのである。

- ⑩ pa git on sund rêon;  
pær git eagorstream earmum þehton,  
mæton merestræta, mundum brugdon,  
glidon ofer garsecg; geofon ypum weal,  
wintrys wylm[um]. [Beowulf 512b-516a]

(There you embraced the sea-streams with your *arms*, measured the sea-ways, flung forward your *hands*, glided over the ocean, the sea boiled with waves, with winter's swell.) (D)

ベオウルフがブレカと冬の荒海で命を賭けて水泳競技した時の様子をウンベルスが語る場面である。両泳者が力強く泳ぐ様子が *earm* と *mund* という「手」に関する 2 語を使って表現されている。海水をおおう様は *earmum* で表現され、それを後方に押しつけ推進する場面では *mundum* で表現されている。ここでも当然頭韻をそろえる必要性もあろうが、腕力に力点が置かれているので *mund* という語が最適なのであろうと考えられる。

- ⑪ wæs þæm hæftmece Hrunting nama;  
þæt wæs an foran ealdgestreona;  
ecg wæs iren, atertanum fah,  
ahyrded heaposwate; næfre hit æt hilde ne swac  
manna ængum para þe hit mid mundun bewand,  
se ðe gryresiðas gegan dorste,  
folcstede fara; [Beowulf 1457-1463a]

(Hrunting was the name of the hilted sword; it was one of the oldest of ancient treasures ; its edge was iron, decorated with poison-stripes, hardened with battle-sweat. Never had it failed in war any man of those who *grasped it in their hands*, who dared enter on dangerous enterprises, onto the common meeting place of foes.) (D)

フロスガール王の部下ウンベルスがベオウルフに貸し与えた名刀フルン

ティングについてのくだりである。毒が塗られ血で鍛えあげられた鋼鉄製の名刀を力強く握りしめる様子が *mund* で表現されている。これもやはり握力に重点が置かれた *mund* の使い方である。

- ⑱ For ðon sceall gar wesan  
 monig morgenceald *mundun* bewunden,  
 hæfen on *honda*, nalles hearpan sweg  
 wigend wecccean, [*Beowulf* 3021b-3024a]  
 (Therefore many a spear, cold in the morning, shall be *grasped with fingers. raised by hands*; no sound of harp shall waken the warriors.)  
 (D)

この部分には *mund* と *hand* の両語が使われているので両語の意義の比較には好都合である。*gar* (槍) を握る「手」は *mund* であり、それを権力の象徴として高々と掲げる「手」は *hand* であることが窺われる。

- ⑲ Ic on ofoste gefeng  
 micle mid *mundum* mægenbyrðenne  
 hordgestreona, hider ut ætbær  
 cyninge minum. [*Beowulf* 3090b-3093a]  
 (In haste I seized with my *hands* a huge burden of hoard-treasures, of great size, bore it out here to my king.) (D)

頻死の状態にあるベオウルフと息絶えた火龍の側そばにある洞窟の中へ、勇者ウィグラーフが宝物を取りにでかける場面である。彼が宝の山を「手」で掴み取る箇所にはやはり *hand* や *folm* でなく *mund* が使われている。以上⑮～⑲の5例ともすべて握力、腕力としての「手」を表現したい時には *mund* が用いられていることになる。

#### [V] *folm* 考察

J. R. Clark Hall の *A Concise Anglo-Saxon Dictionary* によると *folm*

には詩語の表示が与えられ、語義は *palm, hand* となっている。Bosworth-Toller の辞典にも *the palm of the hand, the hand* の語義が挙げられている。

両詩には総計10ヶ所で *folm* が用いられているが、以下に用例を示したように *Maldon* では3例とも人間の「手」に用いられ、*Beowulf* では2例が人間の「手」に、残り5例は怪物グレンデルの「手」に用いられている。

- ⑳ hu hi sceoldon standan and þpone stede healdan,  
and bæd pæt hyra randa[s] rihte heoldon  
fæste mid *folman*, and ne forhtedon na.

[*Maldon* 19-21]

(how they should stand and keep their station, and bade them hold their shields upright firmly with their *hands* and be not afraid.)

Byrhtnoth が軍を率いて部下を励ます場面である。文脈から明らかなように「楯」をしっかりと握る「手」として *folm* が用いられている。前述したように *Maldon* の詩中には *mund* の用例が一例もない。*Beowulf* では⑰⑱で見たように槍や剣を握る「手」は *mund* で表現されていた。与えられた資料から考える限り *folm* にも *mund* と似て「握る手」としての意義が感じとられる。しかし次例でみるように *folm* には「握った手」の「掌」の部位により強調点が置かれているように思われる。

- ㉑ Hi leton pa of *folman* feolhearde speru,  
gegrundene garas fleogan;  
bogan wæron bysige, bord ond onfeng,  
biter wæs se beaduræs, [*Maldon* 108-111]

(Then they let the spears, hard as a file, go from their *hands*; let the darts, ground sharp, fly; bows were busy; shield received point; bitter was the rush of battle.)

このくだりも槍を握る「手」としての *folm* の用例である。しっかりと



⑭

Duru sona onarn

fyrbendum fæst, syþðan he hire *folmum* (æthra)an;  
 onbræd þa bealohydig, ða (he ge)bolgen wæs,  
 recedes mupan. [ *Beowulf* 721b-724a ]

(Quickly the door gave way, fastened with fire-forged bands, when he touched it with his *hands*) (D)

グレンデルが Heorot の館の鉄でとめられた頑丈な扉に触れたらそれはひとたまりもなく開いた場面である。怪力の「手」である。

⑮

Forð near ætstop,

nam þa *mid handa* higepih tigne  
 rinc on ræste, [ *Beowulf* 745b-748a ]

(He stepped closer, then felt *with his arm* for the brave-hearted man on the bed, reached out towards him, the foe *with his hand*.) (D)

⑭では人間に対して *hand* と *folm* の両語が使われていたが、ここでは怪物グレンデルに用いられている。⑥で述べたようにグレンデルを擬人化して *hand* を前半で使い、後半で怪物の凄み、獰猛さを醸し出すために *folm* を使ったとも考えられないこともない。しかしそれは *Maldon* の用法のすべて (⑳, ㉑, ㉒) で人の「掌」に対して *folm* を使い、更に創作年代の古い *Beowulf* の中にも㉓, ㉔でみるように人の「掌」に対して使われているので、*folm* も人以外の動物にも人にも用いられたと解釈する他ない。ただし *folm* は㉔で *hand* と併用された場合と同様、*hand* より相対的に小さな部分が意識されていると解される。

⑯ Hream wearð in Heorote; heo under heolfre genam

cupe *folm*; cearu wæs geniwod,  
 geworden in wicun. [ *Beowulf* 1302-1304a ]

(Outcry arose in Heorot; she (Grendel's mother) had taken, in its gore, the famed *hand*.) (C)

妖女がヘオロートに残された息子グレンデルの *folm* を奪い返していく場面である。この場合の *folm* は⑭に示したようにグレンデルの *arm and shoulder* の部分を含めたものとしての「手」と思われる。

- ⑭ Hwæpere he his *folme* forlet  
 to lifwrape last weardian,  
*earm ond eaxle*, no þær ænige swa peah  
 feascaft guma frofre gebohte;

[*Beowulf* 970b-973]

(However, he left us a visitor's token, *a hand*, life-protector, *the whole arm and shoulder*.) (C)

この部分の '*folme*...*earm ond eaxle*' は⑥の '*hand*...*earm ond eaxle*' と同様に *variation* の手法を使っている。

- ⑮ Ne þæt se aglæca yldan pohte,  
 ac he gefeng hraðe forman siðe  
 slæpendne rinc; slat unwearnum,  
 bat banlocan, blod edrum branc,  
 synsnædum swealh; sona hæfde  
 unlyfigendes eal gefeormod,  
*fet ond folma*. [*Beowulf* 739-745a]

(Nor did the monster think long to delay; he lunged the next moment, seized a warrior, gutted him sleeping—ripped him apart—bit into muscles, swilled blood from veins, tore off gobbets, in hardly a moment had eaten him up, all of the dead man, *even hands and feet*.) (C)

グレンデルが眠っているフロスガールの部下の一人を引き裂き、その死体の足と手の部分すべてを食い尽す場面である。'*fet ond fulma*' は文脈からして *legs and arms* と解すべきであろうが、原義はやはり *feet and hands* で足(くるぶしから下の部分)と手(手首から指の部分)であろう。



⑲ Ða wæs haten hrepe Heort innanweard  
 folmum gefrætwod; fela pæra wæs,  
 wera ond wifa, þe þæt winreced,  
 gestsele gyredon. [Boewulf 991-994a]

(Then was it ordered that Heorot be within quickly adorned by hands.) (D)

グレンデル退治の功を称えてベオウルフを迎えるためヘオロートの館を装飾準備する場面である。装飾をする *folm* は小手先の器用な「手」を意味しよう。従ってここでも「手」の小さな部分と解してよいであろう。

#### 〔Ⅳ〕 結 論

本稿では *Beowulf* 及び *The Battle of Maldon* の 2 篇の古英詩に現われる *hand*, *mund*, *folm* の用例総数52のすべてを検討し、そのうち30例を本文及び注に挙げた。2 作品という限られた資料の範囲内ではあるが、「手」を表す同義語 3 語について次のようなことが判明した。

- (1) 詩語であるとされる *mund*, *folm* には *hand* にみられるような figurative な用法は二作品にはみあたらず、いずれも身体機能としての「手」を表現する用法のみである。<sup>(12)</sup>
- (2) 他の古英語文献のすべてを調査してみないと断言はできないが、両詩における限り同義語とされる 3 語の身体部位としての意味領域を比較すると *hand*, *folm*, *mund* の順で狭くなると考えられる。身体部位としての O. E. の *hand* は Mod. E. の *hand* のように必ずしも「手首から指先までの部分」を指すとは限らず、時に *arm*, *shoulder* の部分を漠然と含む表現として用いられている。*folm* は *hand* と同部位を示す語として用いられることもあるが、*hand* と併用された場合には指し示す部分が *hand* より小さい含意が感じられる。*folm* と *mund* を比較すると手の「掌」という観点からすると同一のようであるが、*mund* は身体部位として「掌」の意よりも「握力」に重点が置かれた用法が多い。また *mund* には *folm* のように *hand* に相

当するような大きな部分としての「手」の意義は感じられない。

- (3) *hand*, *folm* は人にも動物の「手」にも用いられるが, *mund* にはその用法はない。
- (4) 一番意味領域が広く *modern reflex* を持つ *hand* は両英雄詩においては換喩的に武力または武人のシンボルとして用いられているが, このような用法は *folm*, *mund* にはみあたらない。

最後に同義語と頭韻の関係について一言ふれてみたい。古英詩詩作技法上 *alliteration* の果す役割の重要性はいうまでもないことである。本稿で検討した *hand*, *mund*, *folm* についても, ほとんどが各々の詩行において頭韻を踏ませて使われている。それでは果して当時の詩人はこれら「手」の同義語 3 語をそれぞれ多少の語義の違いやニュアンスが違ってても, 頭韻上の制約から頭音が他の語と合致するものを選んで使ったのであろうか。私見では, これら 3 語が用いられている文脈から考えて, 当時の詩人が細かい語義の差を無視して適宜頭韻上の制約のためいずれかの語を用いたのではないと考える。むしろ詩人は類い稀なる創作能力を駆使して 3 語の持つ内包的な意味と頭韻上の制約を十分に計算しつくして各詩行を創作していったと思われる。詩とは, 特に口誦性が云々される *Beowulf* などにおいては詩を聴く人々が共通に抱く語の響き, イメージが鬚髯する語を入念に精選して作りあげられたものであると考えたい。

(表 1) (3 語の頻度数)

語彙 作品名	<i>hand</i>	<i>mund</i>	<i>folm</i>	計
<i>Beowulf</i>	31	5	7	43
<i>Maldon</i>	6	0	3	9
計	37	5	10	52

(表 2) (3 語の意義領域別リスト)

*hand*, *mund*, *folm* の 3 語を明確に意義領域別に分類することはお互いに重なる部

分もかなりあるので、非常に難しいが、本リストでは52の用例を調べてみて特徴づけられる傾向がみられるものでそれらを示すことにする。(B.M. はそれぞれ *Beowulf*, *The Battle of Maldon* を指す。また数字は各詩の詩行数を示す。)

同義語		hand	mund	folm	計
項目					
身体部位としての手	手	M149, B746, B1520, B2575			4
	掌	M7, B495, B1290, B1443, B1678, B1983, B2216, B2405, B2720, B2840, B3023, B3124		M21, M108, M105, B745, B992	17
握力, 筋力としての手		M14, B540	B236, B514, B1461, B3022, B3091		7
人以外に用いられる手		B746, B834, B927,, B983, B2099		B158, B722, B970, B1303, B748	10
武力, 武士のシンボルとしての手		M14, M141, B558, B814, B2137, B2509, B2684, B2697			8
人, 側, 手中, 権力としての手		M112, B656, B686, B1343, B2208, B2488			6
計		37	5	10	52

(注)

- ① *The Battle of Maldon* の現代英語訳はすべて R. K. Gordon 訳 “Everyman’s Library” pp. 329-334 を使用した。下線部は筆者。
- ② 騎兵隊でなく歩兵戦で敵と交戦する理由について D. G. Scragg は次のように説明している。“The command to drive away the horses here may have been to prevent the Vikings from capturing them, as the Anglo-Saxon Chronicles implies in 994, 999 and 1010.” *The Battle of Maldon*, edited by

D. G. Scragg, 1981, Manchester University Press. p. 68.

- ③ *Beowulf* の現代英語訳については E. T. Donaldson 訳と H. D. Chickering, Jr 訳を使用した。それぞれ訳文のあとに (D). (C) と明記した。下線部筆者。Donaldson, E. Talbot, *Beowulf*, A New Prose Translation.

W. W. Norton, New York. 1966.

Chickering, Jr. H. D. *Beowulf*, A Dual Language Edition, Anchor Press./Doubleday, 1977.

- ④ グレンデルや妖女が擬人化されている好例は *Beowulf* 1545-1547a, 2137-2140a などにみられる。
- ⑤ グレンデルの「手」に対して *hand* が用いられている例は *Beowulf* 747, 834, 927, 983, 2099 の 5 例である。また *folm* が用いられている例は *Beowulf* 158, 722, 748, 970, 1303 の 5 例である。
- ⑥ 敵を殺した証として「手」ではなく「首」を用いている場面も *Beowulf* にはみられる。しかし「首」を用いた記述には「手」を用いた場合程の迫力感を感じられない。

“Ne nom he in|pæm wicum,      Weder-Geata leod,  
maðmæhta ma,      |pēh he pær monige geseah,  
buton þone *hafelan*      ond|pa hilt somod  
since fage;      [*Beowulf* 1612-1615a]

(The man of the Weders took nothing more from the dark gift-hall, despite heaped treasure, except that *head* and the hilt, jewel-bright) (C)

- ⑦ ‘*earm ond eaxle*’ などの Coordinated Words Used As Variation In *Beowulf* については拙論参照、『英米文学研究』第18号、梅光女学院大学英米研究会、1983. pp. 141-163.

- ⑧ フロスガール王の高官で勇者であるさすがのウンベルスも怪物グレンデルの *hand* を見て沈黙してしまう場面がある。

Pa wæs swigra secg,      sunu Ec[g]lafes,  
on gylpspræce guðgeweorca,  
sipðan æpelingas      eorles cræfte  
ofer heanne hrof      *hand* sceawedon,  
feondes fingras;      [*Beowulf* 980-984a]

(Unferth, Ecglaf’s son, was then more silent, had no more taunts about valor in combat once all the nobles had looked at that *hand*, the gigantic fingers, high on the roof through the young earl’s strength) (C)

- ⑨ ベオウルフが湖底で妖女と闘う場面 (1. 1534a) ではベオウルフは自らの力、手の握力を信じた。strengre getruwode, *mundgripe* mægenes. [*Beowulf* 1533b-1534a]

- ⑩ Mod. E にも hand を人の意で使う例はある。O. E. D. hand 7. In reference to the person who does something with his hands ; hence denoting the person in relation to his action, (b) spec. In reference to an artist, musician, writer, actor, etc. as the performer of some work ; hence sometimes used to denote the person himself,
- ⑪ 厨川文夫訳（厨川文夫著作集. 上 p. 262.）ではこの部分を次の様に訳出している。「時に〔敵〕の武士の一人は手より、掌より槍を飛ばしめぬ。」（下線部筆者）また同様の句は *Maldon* 7 にもみられる。“he let him þe of handon leof[n]e fleogan hafoc wið[þæs] holtes [*Maldon* 7-8a] (Then he let the loved hawk fly *from his hands* to the wood.)
- ⑫ *Beowulf*, *Maldon* の両詩には *mund* の比喩的用法はみあたらないが〔N〕*mund* 考察の冒頭に示したように Bosworth-Toller の An Anglo-Saxon Dictionary の *mund* の項には protection, guardian (ship) などの意義もある。これらの比喩的意味も元来は「手」でしっかり握る」ことから派生したと考えられる。

(テキスト)

1. *Beowulf And The Fight At Finnsburg*, 3rd ed. Fr. Klaeber, D. C. Heath And Company, 1950
2. *The Battle Of Maldon And Short Poems From The Saxon Chronicle*, Walter John Sedgefield, D. C. Heath And Company, 1904.
3. *The Battle of Maldon*, D. G. Scragg, Manchester University Press, 1981

(訳書)

1. *Beowulf* translated by E. Talbot Donaldson, Yale University, W. W. Norton & Company, Inc. 1966
2. *Beowulf*, A Dual-Language Edition, Howell D. Chickering, Jr, Anchor Press/Doubleday, 1977
3. ベーオウルフ, 厨川文夫訳, 岩波文庫, 1977
4. 新口語訳ベオウルフ, 大場啓蔵訳, 篠崎書林, 53年
5. 厨川文夫著作集(上)安東伸介, 岩崎春雄, 高宮利行編, 金星堂, 58年所収, “The Battle of Maldon の言語に就て” pp. 233-245 及び「モオルドンの戦」の歌 pp. 246-271.

(辞典)

1. An Anglo-Saxon Dictionary, J. Bosworth and T. Toller, Oxford, 1898.
2. A Concise Anglo-Saxon Dictionary, 4th ed, J. R. Clark Hall, With A Supplement By Herbert D. Meritt, Cambridge University Press, 1975
3. O. E. D.